台大日本語文研究第 24 期
2012 年 12 月，頁 51-74
2012-10-20 收稿，2012-12-12 通過刊登

昭和作家的「南洋行」
—以中島敦與高見順為探討中心—

洪瑟君*

摘要

日本自明治時期開始提倡南進論。在南進論的影響下，日本國內開始將目光的焦點轉移至南方，對南方的關注也逐漸高漲。許多的作家動身前往南方並寫下許多與南方相關的作品；抑或雖未親身體驗南方生活卻也依照想像或虛構的方式以南方爲背景來撰寫故事。因此，日本南方文學中的南方樣貌，由於多種因素的影響而呈現出豐富的樣態。

高見順（1907-1965）與中島敦（1909-1942），兩人都是在這南方風潮中前往南洋旅行，並寫下南方相關作品的作家。昭和 16 年，中島敦出發前往當時委任日本統治的帛琉。同年，高見順前往荷蘭屬地印尼旅行。對南方都懷抱著憧憬的二人來說，昭和 16 年的南洋行都是首次的南洋體驗。擁有許多相似點的兩位作家幾乎在相同時期動身前往南洋旅行，但兩人的作品中所呈現出的南洋樣貌確有很大的差異。本稿將以中島敦與高見順的南洋相關作品爲探討中心，比較兩人作品中所呈現的南洋樣態以及作家對南方的看法，藉此探討昭和時代南方文學的樣態。

關鍵詞：南方、南洋體驗、中島敦、高見順

* 台灣大學日本語文學系助理教授

The Southern Experience of Writers in Syowa Era: Take Atsushi Nakajima and Jyun Takami as the Core of Exploration

Hung, Se-chun*

Abstract

The Southern Expansion Doctrine has been promoted in Japan since the Meiji Era. Under the influence of the Southern Expansion Doctrine, the domestic Japan started to switch the focus to the South and therefore paid more and more attention to the South. Many writers headed for the South to write works on the South or even if they didn't personally go to the South, the story backgrounds of their works were based on the South. As a result, the images of the South reflected in Japan's South Literature were presented in rich forms due to the various influential factors.

Both Jyun Takami and Atsushi Nakajima are the writers who went to the South during this period and constructed the relevant works on the South. In the 16th year of the Showa Era, Nakajima went to Palau which was mandated by Japan by then. In the same year, Takami traveled to the Dutch East Indies. To both of them who fantasized about the South, the trip to the South in that year was the very first Southern experience. Despite the two writers having various similarities and traveling to the South at the same time, the image of the South presented in their respective works varied a lot. This paper will discuss the types of the South Literature in the Showa Era by focusing on the South Literature of

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

the two writers, as well as comparing the different images of the South in their works and the writers' view toward the South.

Keywords：South, Southern experience, Atsushi Nakajima, Jyun Takami

昭和作家の〈南洋行〉
—中島敦と高見順を中心に—

洪瑟君*

要旨

明治以降、日本は南進論に基づき南方に進出した。日本中が南に目を向け始め、南方に対する関心が徐々に高まっていた。多くの作家は南に発ち、南方に関する作品を書き、或いは実際に南方に行かず、想像やフィクションによって南方を背景として作品を描いた。それ故、日本の南方文学における南方風貌は、多様な要素によって豊かな様相で描かれている。

高見順（1907-1965）と中島敦（1909-1942）は、二人ともその南方ブームの中、南洋へ旅立ち、南に関する作品を書いた作家である。昭和 16 年、中島敦は当時日本に委任統治されたパラオへ旅に出た。同年、高見順は蘭印へ旅立った。南方に多大な憧憬を持っていた二人にとって、昭和 16 年の南洋行は二人の初めての南洋体験であった。多くの類似点を持つ二人の作家がほぼ同じ時期に南洋へ旅立ったが、二人の作品における南洋には大きな差異が見られる。本稿では、中島敦と高見順の南洋作品を取り上げ、二人の作品における南洋の様態や作家の見方を比較し、昭和時代の南方文学の様態を検証したい。

キーワード：南方、南洋体験、中島敦、高見順

* 台湾大学日本語文学科助理教授

昭和作家の〈南洋行〉
―中島敦と高見順を中心に―

洪瑟君

一、はじめに

明治以降、日本は南進論に基づき南方に進出した。日本中が南に目を向け始め、南方に対する関心が徐々に高まっていた。多くの作家は南に発ち、南方に関する作品を書き、或いは実際に南方に行かず、想像やフィクションによって南方を背景として作品を描いた。それ故、日本の南方文学における南方風貌は、多様な要素によって豊かな様相で描かれている。

高見順（1907-1965）と中島敦（1909-1942）は、二人ともその南方ブームの中、南洋へ旅立ち、南に関する作品を書いた作家である。中島敦は昭和16年に、南洋島民向けの教科書を編纂するために、当時日本に委任統治されていたミクロネシアへ行き、南洋庁の職員として約一年間南洋に滞在した。南洋から帰京した後、彼は「南島譚」三篇と「環礁」六篇などの〈南洋物〉を書いた。一方、高見順は昭和16年に、二度も南洋へ行った。一回目（昭和16年1月から5月まで）は画家の友人三雲祥之助と和蘭領インドネシアへ旅立ち、二回目（昭和16年12月から昭和18年1月まで）は徴用作家としてビルマへ派遣されたのである。一回目の蘭印旅行の後、高見順は「蘭印の印象」や「蘭印点描」などの文章を書き、蘭印での南方体験を活字化した。そして、二回目のビルマでの徴用体験によって、「ビルマ記」や「ビルマ雑記」などの作品を描いた。

中島と高見は少年時代、ともに旧制第一高等学校文科甲類のエリート学生であった。二人とも文学を愛好していたことから、文芸部の文芸委員を担当したこともある。高見は1927年に東京帝国大学の英文学科に入った一方、中島も1930年に東京帝国大学の国文学科に入学した。母親の愛に恵まれなかった中島と父親に愛されなかった

私生児の高見には、二人の生い立ちや学歴や南方への深い憧憬など、類似した点が多い。しかし、多くの類似点を持つ二人の作家はほぼ同じ時期に南洋へ旅立ったが、二人の作品における南洋には大きな差異が見られる。中島と高見はどのように南洋を見ていたのか、そして作品の中にどのように南洋を描いたのか、本稿では、中島敦と高見順の南洋に関する作品を取り上げ、二人の作品における南洋の様相や作家の見方を比較し、昭和時代の南方文学の様相を検証したい。ただし、徴用作家としてビルマに滞在していた時期に書いた作品の分析には、政治的要素など複雑な原因も配慮しなければならないため、高見順のビルマでの徴用体験を基にして書かれた作品については今回の検討範囲には入れない。

二、中島敦と高見順の〈南洋行〉

周知のように、中島敦は南洋へ行く前に、既に南洋に多大な憧憬を抱いていた。病弱のため自分の思い通りに各地へ旅に出られなかったが、文学作品の世界において、彼は精神的に各地を遍歴した。ゴーガンの『ノアノア紀行』やスティヴンソンの関連著書など、中島は南洋に関する作品を大量に読み漁り、そして詩歌「ある時はゴーガンの如逞ましき野生のいのちに觸ればやと思ふ」[1]や、「ある時はスティヴンソンが美しき夢に分け入り醉ひしれしこと」[2]などのように、自分の作品の中に南洋への憧れを表現した。彼は文壇のデビュー作「光と風と夢」の中にも、自分の南方夢を主人公のスティヴンソンに託し、心の中に潜んでいる南方憧憬を十分に表したのである。「南への憧れ」の他に、中島を昭和 16 年に南洋へ行かせたのは「転職への願望」と「南洋の地に療養に行きたいとの願い」などの理由も含めている[3]。当時宿痾の喘息に苦しめられていた中島は南洋

1 「遍歴」(『中島敦全集』第 2 巻、筑摩書房、1976 年、p.248)
2 同前注、p.249。
3 勝又浩氏は「南洋書簡について」に、中島の南洋行決意へと至る心境の推移を「転職」への希望、「南洋の地に療養に行きたい」との願いと「生来のエキゾティシズムからくる憧れ」とスティヴンソンとの符合など三つの理由から捉えていると指摘した。(勝又浩著『中島敦の遍歴』、筑摩書房、2004 年、

の暖かい環境で療養したいという期待を抱きながら、南洋という新しい環境の中で得た見聞を活かして良い作品を書こうとする決意を持ち、ついに南洋へ出発した。そして、南洋庁の職員として約一年間の南洋生活を体験していたのである。

一方、高見順は日記の中で、「鮮やかな色彩にあこがれていた。灰色から抜け出たかった。――事実、真赤な大きなはげしい花などを見たいと思ったが、そういうことは私の気持ちのいわば、象徴といえる」[4]と述べている。昭和 12、13 年の頃から、自分の内にはずっと南への憧れが燃えていたという気持ちを表明したのである。南洋への憧憬は勿論高見を南洋へ旅立たせた一因である。しかし一方、高見順の〈南洋行〉は「創作活動における行き詰まりや停滞感、私生活上のトラブルなど、いわば『手負い』『満身創痍』とも形容すべき心を抱いて旅立った」[5]旅とも言える。作品「如何なる星の下に」は昭和 14 年 1 月号より昭和 15 年 3 月号まで 12 回にわたって雑誌『文芸』に連載された小説である。作者の分身とも呼べる主人公「小説家の倉橋」は、全うな小説を書きたい「欲求が衝き上げてくるだけで、それを小説に具体化することが出来ない」[6]ため、自分のうちに鬱積し、「一種のヒステリーみたい」[7]に成っていた。そして「戦場へ行ったら、そのヒステリーみたいなのから救はれるかもしれない」[8]と思い、南洋へ行こうとする気持ちを表している。また、彼が蘭印旅行から帰った後の作品「ある晴れた日に」の中にも、登場人物の「小説家高見がやや偽悪家的にデフォルメして造形された」網代[9]と「高見の心性や感情そのものを抽出して造形された」野崎[10]を通して、「自己の改造」や「心の方向転換」などの目的のため、当時南洋

---

pp.75-111）

4 昭和 16 年 2 月 5 日の日記。(『高見順日記』第 1 巻、勁草書房、1965 年、p.56)。

5 木村一信「高見順〈南洋行〉序説」『昭和作家の〈南洋行〉』、世界思想社、2004 年、p.29。

6 「如何なる星の下」『高見順全集』第 1 巻、p.171。

7 同前注。

8 同前注。

9 同注 5、p.23。

10 同前注。

へ行こうとした原因を語る。蘭印へ旅立って行く動機は作品における登場人物を通して述べるだけではない。高見は日記の中で、南洋へ行く理由についても、次のように記述している。

> ――私は、たしかに行きづまっている。何か新生面をひらかねばならぬ。そのための蘭印だとも思うのだった。はたしてこの旅で私の心がひらけ、私の文学の新しい面がひらけるかどうか、それはわからない。
>
> しかしひらけるかもしれないという希望を持てる。かくて出て来たわけでもある[11]。

彼は文学創作上の行き詰まりを打開するため、蘭印へ向けて旅立ったと考えられる。更に、高見は昭和 15 年の年末、長女の由紀子の死に出遭った。長女の死によるショックを受け、悲しみながらも、彼は「意地でも行って見せる」という思いが募り、南洋へ行くことに決然と心を決めたのである。

中島と高見の南方へ行くきっかけと目的は異なっていたが、戦争が勃発する寸前の昭和 16 年に、不安定な時局の中、危険を冒して南洋へ旅に出た最も大切な要因は、二人の心の中に潜んでいる未知の南洋に対する憧憬と文学創作上の窮した状態を打開したい願望と言えよう。

〈南洋行〉の経験は中島と高見の作家人生に、共に大きな影響を与え、二人の〈南洋行〉以降の作品もこの南洋行の体験によって大きく変貌したと言える。南洋での生活において、中島は持ち前の鋭い観察力を充分に発揮し、南洋独特の周りの環境、風土、習慣、人情などを発見しながら、生活上の不便さによって、家庭生活のような小さくて平凡なことが如何に貴重であるかも悟った。このような「『細部』の価値の発見と確認は、彼の既にもっていた人間観や歴史観を内側から濃やかに肉付けするものであり」[12]、更に彼を従来彼自身が抱いていた「『唯一のかけがへの無い所与なのだ』と断定した

[11] 同注 4、p.58。
[12] 濱川勝彦「南洋行の意味」『中島敦の作品研究』、明治書院、1981 年、p.190。

『形而上学的迷蒙』」[13]から目覚めさせる契機になった。南洋行以前の作品に頻繁に表現された、所謂「自己懐疑」「自己分析」は、もちろん後期の作品においても完全に消滅してはいない。しかし、木村一信が論じたように、

> 観念性が強く、物語としてのふくらみに乏しい初期の作品から、晩年の歴史や資（史）料のうちに想像力を駆使して構築された豊かな物語世界、また、「南洋」の自然や風物に寄せた目の輝きに至るまで、中島文学は短時間のうちに大きな変貌をみせている[14]。

南洋へ行く前に中島が抱いていた「自己懐疑」「自己分析」のような観念的、抽象的な発想が、パラオから帰国した後は、具体的、積極的な行動へと変化、発展した。そして、そのような変化も中島の後期文学に反映されているのである。

他方、南洋行以前の高見順には自己卑小感とでも言うべき感覚が顕著であった。彼は自分が弱者だと感じる意識を持つだけに、自分以外の弱者の苦しみや悲しみをよく実感できたのである。軍事的・政治的・経済的な領域のみならず、文化的な領域でも和蘭に侵略さてた蘭印で、高見は和蘭の圧倒的な政治的優位の前で屈辱的な立場に置かれているインドネシア人の悲哀に深い共感を寄せた。高見は蘭印での体験によって、「『芸』の持つ力に眼が見開かれ、それと共にそれが被支配民族の『芸』であるジレンマを覚え、自らの作家としての生きる方向に啓示を得る」[15]と言える。そして、その貴重な経験をきっかけとして、彼は「芸」を尊重し、「芸」を守ろうとする思いが生じ、その後常に口にした「身は売っても芸は売らぬ」という意識を形成させたのである。〈南洋行〉によって、高見の意識の変革は大きく進み、その後の作品創作にも深く影響したと考えられる。

---

[13] 同前注、p.194。
[14] 木村一信「持続と変貌と―中島敦をめぐって」、同注 5 前掲書、p.238。
[15] 同注 5、p.30。

三、南洋島民の言動に対する眼差し

初めて温帯の内地から熱帯南洋に着いた人々は、誰もが眼に入る熱帯南洋の独特な自然の景色と当地の人々の生活に興味を持つであろう。感受性が一般の人より繊細な作家はいうまでもなく、風俗や習慣など内地の人とまったく違う生活様態を持つ当地の住民に着目するのである。しかし、当地の住民を詳しく観察する一方、作品において表現されたのは、作家の自分の意思によって、異なる視点と解釈で描写されたものである。

中島敦の〈南洋物〉において、南洋の島民の言動に対して全て「不可解」に描かれている。例えば、「夾竹桃の家の女」では、島民の女の不可解な行動について描いている。産後間もない島民の女は、エロチックな眼差しで内地から来た〈私〉を凝視するが、〈私〉に拒否されると、酷い侮辱を受けたと怒りの表情を示す。ところが、三十分ほど経って再び〈私〉と擦違った女は、〈私〉に視線を向けることはなく、怒っている様子もなく、全く〈私〉を認めないような澄まし顔であった。

パラオの民俗によると、「夾竹桃の家の女」における女性は、生まれて二ヶ月にもならない赤ん坊を抱いているため、性交はタブーである。それ故浦田義和は、「はっきりと対象を見ようとする意志と情熱の表れである凝視（文明人の失ってしまった）を、欲情と取り違えるほうがこの島ではむしろ異常である」[16]と述べ、中島が島民の女の挙動を誤って理解したと指摘した。更に、濱川勝彦は中島の昭和17年1月19日の日記と「夾竹桃の家の女」の内容を比較し、事実を無視して自分の意思によって書かれた〈南洋物〉の背後に、中島が懸命に「選択する眼」を獲得しようとする姿が見られると指摘した[17]。つまり、中島は自分の意思によって、南洋島民の心理を読み取ったのである。更に、彼は自分なりの作品を作り出すために、意図的に事実から背離した解釈で島民の心理を説明したと言えよう。

---

[16] 浦田義和『占領と文学』法政大学出版局、2007年、p.173。
[17] 濱川勝彦「『南島譚』の世界」、同注12前掲書、p.207。

中島の〈南洋物〉には、南洋で知り合った民俗学者土方久功の話によって構成された描写が多く見られる。その中で特に「雞」という作品の原話は、土方氏の日記から出たものである。土方によるギラメスブヅ爺さんは優しい心を持ち、土方に頼まれた民芸的な小道具や人形を常に丹念に彫った人物である[18]。病気になった爺さんは土方氏から医者と交渉するという恩を受け、土方に感謝の気持ちを持っていたため、亡くなる前に、牝鶏を土方氏に届けてくれるよう、三人の青年に頼んだ。三羽の牝鶏を送られた土方氏は、爺さんが最後まで自分のことばかりを考えていたことに感動していたと日記に書いている[19]。

それに対し、中島の「雞」におけるマルクープ爺さんは、ギラメスブヅ爺さんをモデルとして描かれた人物であるが、優しいギラメスブヅ爺さんと違い、欲張りで奸悪な人物として描かれている。出来た模型を〈私〉に渡す時、約束した以上の値段を要求し、更に時々贋物や盗んできた物を〈私〉に売った。賞金のために密告者になったり、〈私〉の懐中時計を盗んで逃げたりと、常に悪質な行為をしていた。しかし、そのような貪婪なマルクープ爺さんは悪質な行為ばかりをしている人物ではない。死ぬ前に、〈私〉に感謝するために、牝鶏を〈私〉に送ってくれるように他人に頼んだ。しかも、牝鶏を確実に届けるために、三人も青年に頼んだのである。〈私〉の時計を盗んだ奸悪なマルクープ爺さんは、島民の生活に於いて大切な鶏を三羽も〈私〉に送った。そのマルクープ爺さんの行動に対し、中島は理解できないと書き、更に「南海の人間はまだ〳〵私などにはどれ程も分つてゐないのだといふ感を一入深くしたことであつた」[20]と付加して説明している。

---

[18] 土方氏はギラメスブヅ爺さんについて、「コロールのアラバケヅ部落の者だったが、顔の下半分が、真白とまでゆかない汚れた髯にうずまり、ぎろぎろときつい眼をした爺さんだったが、表情とは似ない優しい心をもった爺さんで、彫物が上手で、いつも私の為に、頼むものを丹念に彫っては届けてくれた」と記している。(「トンちゃんとの旅」『土方久功著作集 6』、三一書房、1991 年、p.353。)

[19] 土方久功「鶏」、同注 18 前掲書、pp.73-76。

[20] 中島敦「雞」『中島敦全集』第 1 巻、筑摩書房、1976 年、p.372。

土方氏の話によると、最後に土方氏に三羽の牝鶏を送ったのは優しいギラメスブヅ爺さんであり、土方氏のお金や時計を盗んだのはもう一人のアマラエル爺さんである[21]。作品中の、密告によって賞金を手に入れた仕業が、実際にどの人物の行為に当たるかは不明であるが、恐らく他の島民をモデルとして描いたのではないかと考えられる[22]。中島が描いているマルクープ爺さんは、ギラメスブヅ爺さんとアマラエル爺さんなど、多くの南洋島民のイメージを組み合わせて創造された人物である。中島は、善と悪という両極化した行為を故意に全て一人の人物によって表したのである。このような描写手法によって、南洋の人間の不可解さが読者の前により一層印象深く現れるのである。

「雞」だけではなく、同じく「南島譚」における「夫婦」という作品は、女同志の喧嘩やモゴル制度などを南洋の慣習に基づいて描いた作品であるが、作中の人物像も同様に不可解なイメージを読者に与える。中島は、南洋の民俗学者とも呼ばれた土方久功と親しく、土方氏から南洋に関する風俗・知識を多く学んだため、南洋の慣習を知らないわけではなかった。濱川氏の指摘の通り、自分なりの眼差しで島民の心理や言動を読み取ったのは、中島の「選択する眼」が作用した結果だと考えられる。中島は南洋島民（他者）をありのままに表象するのではなく、自分のイメージに合わせて南洋島民（他者）の人物像を作り出している。このような意図的に作られた「不可解な南洋人物像」の背後には、サイードが指摘する、「『彼ら』に

[21] 同注 19。

[22] 土方氏の記述によると、当時パラオでは在来の俗信とキリスト教とを混ぜ合わせたガラ・メデクゲイという新しい宗教結社が出来上がっていた。その信仰運動は表向きには当時の官憲によって蛇蠍の如く嫌われており、各地の巡査は仇のようにして「神様狩り」を繰り返していたのである。「神様事件」として度々大量的に検挙され、カルブス（刑務所）に叩き込まれるものなどあったので、この結社は「秘密的」ものだったのである。（同注 18 前掲書、pp.360-361）
中島は「鶏」において、マルクープ爺さんをこの「神様事件」の中で、賞金のために秘密宗教の信者を告発した貪欲な密告者に造形した。しかし、土方氏の記述には、密告者の名前を誰一人も取り上げなかった。密告者としてのマルクープ爺さんの人物像は、明らかにギラメスブヅ爺さん以外の誰かをモデルとして作り上げられたもの、または中島が捏造したものである。

は『我々』のごとく行動し理解することはできない」とするオリエンタリズムの言説が存在しているのである[23]。元来、オリエンタリズムは西洋人の東洋に対する自己中心の思考様式を指す。東方の後進性、神秘性、官能性などを強調し、先入観で東方を見詰める西洋人の思考様式は、19 世紀後半の西洋人の南方の未開地に対する見方にも同じく反映している。実際に南洋で生活し、南洋の島民を観察していた中島は、自分なりの架空の南洋人物像を作り出した。事実の上に想像力を作用させ、特別な雰囲気を作るために作品の素材を処理する中島の手法には、西洋人が先入観で東方や南方を描くオリエンタリズムの概念が潜んでいる。即ち、中島が「選択する眼」で南洋の島民を見るのは、西洋人のオリエンタリズムと同様に、「日本人のオリエンタリズム」[24]という自己中心の思考様式からであると考えられる。

一方、中島敦と同様に昭和 16 年に南洋へ旅に出た高見順は、中島とはやや異なる視点で南洋の島民を観察した。彼は作品「土民の女」において、日本人の家で奉公していた土民[25]夫婦の話を描いている。普段は人の前でおとなしいというより寧ろ卑屈な位のジョンゴスが、酷い夫婦喧嘩をして、細君をポカンと殴り、そして間もなく細君と別れたという話である。ジョンゴス夫婦の離婚について、高見は、それが「土民特有の奇妙な心理」だけでは簡単に説明できないと主張し、更にジョンゴズの立場になり、その夫婦の離婚の理由を一々推測しようとする。また、ジョンゴス夫婦の離婚を例として、

---

[23] エドワード・W・サイード著・今沢紀子訳『オリエンタリズム 上』平凡社、1993 年、pp.40-41。

[24] 川村湊は昭和 8 年から昭和 14 年まで、六年間連載されていた人気漫画『冒険ダン吉』を例として、作者が現実のアフリカや東南アジアの実態とは懸け離れた空想や幻想の「南方の熱帯地方」の物語を描き出したのは、当時「南方」「南洋」についての「日本人のオリエンタリズム」を反映していると指摘している。(川村湊「コロニアリズムとオリエンタリズム」『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、1994 年、pp.21-58)

[25] 当時の日本人は南洋を未開地と看做し、そこの原住民を「土民」や「土人」と称していた。現在、「土民」や「土人」という語は軽蔑的な意味が含まれており、不適切な用語であるが、本稿では、当時未開の南洋植民地の原住民が差別視されたニュアンスを保持するために、そのまま引用する。

彼は一般的に「文明人」にとって「不可解」と思われる土民の行動に対して、下記のように述べている。

> 土民の男女の浮気とか、簡単な夫婦別れとかは、文化の高い民族から見れば不可解な心理といふことになるが、すなわち、それだけ土民が非文化的な無智蒙昧のなかに置かれてゐる、といふことを示すものである[26]。

高見順の言葉を言い換えれば、南洋の慣習として一般的だと考えられることは、文明人にとっては「不可解」なことだと見なされ、また、その「不可解」によって、南洋は「未開」や「非文明化」と見なされるのである。この点から考えれば、高見の南洋島民に対する眼差しは、故意に自分の意思によって南洋島民の習慣・風俗を解釈し、彼らを非文明人と看做す中島の眼差しと完全に異なっていると言える。

また、内地の蘭印紹介の本で描かれている「土民が好んで汚い川でマンデーをする」奇習に対し、高見は「蘭印の印象」において、確かに土民が汚い河でマンデーをしているが、一方では、水道を使っている土民もいると客観的に指摘している。「一度水道を使ひつけたら、汚い河は使へなくなつてゐるのだ。この事実も見のがしてはならない」[27]と、蘭印で自分の目で確かめた事実を如実に描いた。更に、彼は「もし土民が現在のいはば非人間的な無知蒙昧から人間的な生活と文化へと高められたならば、決してうんこ色の河でうんこをし身体を洗ふといふやうな奇習を好んで守らうとは、さらさらしないであらう」[28]と述べ、当時の蘭印土民の立場になり、汚い川でマンデーをする習慣が蘭印土民のやむを得ない選択であると弁明している。

奥野政元は中島が南洋物において、「自己と異質な未開、南洋の現実にあって、自己の文明人であることと、また文明人であることの

---

[26] 高見順「土民の女」『高見順全集』第 19 巻、勁草書房、1974 年、p.68。
[27] 高見順「蘭印の印象」（同注 26 前掲書）、p.40。
[28] 同前注。

独自な姿が象徴されて描かれていると捉え得る」[29]と論じている。奥野氏が論じたように、中島は南洋に未開の楽園というイメージを抱きながらも、自分の中にはやはり無意識に文明人の自覚があったと言える。彼は南洋に来ているガリガリの内地人より、単純で可愛い土人が好きだと言った。しかし、南洋島民の単純さに好感を持っているにもかかわらず、自分の子を南洋で育てれば、南洋の児の顔付きに似てしまい、頭も島民の子に近くなってしまう。これを怖がって、家族を南洋に来させるのをやめたのである[30]。彼は土人の原始的な生き方を羨ましく感じていたが、島民が集まる教会で、日本人女性が島民の言葉によるお祈りに合わせて頭を下げているのを見た時、「何だが、いたましいやうな氣がした」[31]と述べている。未開の南洋での原始的な暮らし方に憧れているとは言っても、文明人が土人の生活に溶け込もうとする行動に対し、中島はやはり痛ましく感じていたのである。「寂しい島」では、〈私〉はご馳走してくれた老婆に「日本語」で礼を言い、「夾竹桃の家の女」においても、〈私〉は女に日本語で「サヨナラ」と言った。〈私〉は南洋で暮らしているにもかかわらず、意識的に南洋島民とは異なる言語を使っている。「内地人」(文明人)という意識を強く抱いている中島は、終始自分と未開の南洋との間に一線を画していた。このような文明人としての意識のもとに、彼は南洋を未開地に看做し、作品には南洋島民を意図的に「不可解」な他者に造形したのである。

確かに物質生活や精神生活の面から考えれば、当時の南洋は先進

---

[29] 奥野政元「『南島譚』――夢と現実」(奥野政元『中島敦論考』、桜楓社、1985年)、p.193。

[30] 昭和16年7月6日、中島タカ宛の手紙による。
「(前略)お前達をよびたくなるが、しかし、之はよつぽと考へて見なければならぬことだと思ふ。こちらで育つた幼兒は大抵、島民に似た容貌をしてゐるんだよ。確かに。色の黑いのは仕方が無いとしても。目がドングリ眼で髪がちぢれて、唇が厚いんだ。頭も島民の子に近いんぢやないかと思ふ。ふしぎだけれど、之は本當なんだ。ノチヤボンが、そんなになつちや、僕はいやだな。この前の手紙で書いたヤップ島の院長さんの家へ行つた時、僕はそのお嬢さん〔さん〕(七つ)を、本當に土人の兒と思つたものね。これは考へものだよ。」(『中島敦全集』第3巻、筑摩書房、1979年、p.604)

[31] 昭和16年12月7日、中島たか宛の手紙による。(同注30前掲書、p.672)

国と比べれば「未開」「非文明化」の境地から抜けず、当時の南洋島民もまだ無知蒙昧な段階に留まっていたと言える。しかし、南洋の固有な慣習を全て「不可解」と看做し、更に南洋島民の言動を故意に「不可解」に造形した中島の描写は、高見順の南洋に対する客観的な理解とは大きな差異がある。

四、現実の南洋に対する印象

長い間南方に憧れていた中島にとって、南方は未開で自然の豊かな、原始的な美しい楽園であった。しかし、彼は現実の南洋を見た後、この未開の理想郷が文明の侵入によって消えていったことに気付いた。この消えた楽園に対する痛ましい気持ちは、「マリヤン」における南洋風景の描写を通して表されている。

> 實際、此のコロールといふ街——其處に私は一番永く滯在してゐた譯だが——には、熱帶でありながら溫帶の價値標準が巾をきかせてゐる所から生ずる一種の混亂があるやうに思はれた。最初此の町に來た時はそれ程に感じなかつたのだが、其の後一旦此處を去つて、日本人が一人も住まない島々を經巡つて來たあとで再び訪れた時に、此の事が極めてハツキリと感じられたのである。此處では、熱帶的のものも溫帶的のものも共に美しく見えない。といふより、全然、美といふものが——熱帶美も溫帶美も共に——存在しないのだ。熱帶的な美を有つ筈のものも此處では溫帶文明的な去勢を受けて萎びてゐるし、溫帶的な美を有つべき筈のものも熱帶的風土自然（殊に其の陽光の強さ）の下に、不均合な弱々しさを呈するに過ぎない。此の街にあるものは、唯、如何にも植民地の場末と云つた感じの・頽廢した・それでゐて、妙に虛勢を張つた所の目立つ・貧しさばかりである[32]。

内地人が温帯の価値観を熱帯島に持ち込んだため、美というものが混乱の状態になっている。「溫帶文明的な去勢」によって、熱帯的な

[32] 中島敦「マリヤン」（同注 20 前掲書）、p.403。

美が萎れ、残ったのは「植民地の場末と云つた感じの・頽廃した・それでゐて、妙に虚勢を張つた所の目立つ・貧しさ」だけである。つまり、文明開化によって未開の南洋は元の風貌を失い、既に純粋無垢の理想郷ではなくなったのである。また、このような温帯の価値観が混ざった南洋で、〈私〉はマリヤンと呼ばれる島民の女と知り合った。南洋島民の典型的な体格と外貌を持つマリヤンに、〈私〉が「眞白な洋装にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にした」[33]マリヤンの盛装したいでたちを見る場面でも、「何かしら可笑しさがこみ上げて來るのを禁じ得なかつた」[34]という描写がある。南洋の風景と同じく、マリヤンの身にも文明開化がもたらした影響によって不調和が見られるのである。

また、「マリヤン」だけではなく、「夫婦」の中にも、南洋の伝統的な風俗に現代文明が混ざっているという不調和なシーンが入っている。「夫婦」には、当時のパラオでも伝統的な恋喧嘩を盛んに行われており、中島自身もパラオに滞在中直接それを目撃したことがあると書いている。ただ昔の恋喧嘩と違ったのは、それを取巻いて囃し応援し批評する観衆の中に、「ハモニカを持つた二人の現代風な青年」[35]が交っていることである。しかも、二人とも、「最近コロールの町に出て購めたに違ひない・揃ひの・真青な新しいワイシャツを着込み、縮れた髪に香油をべつとりと塗り付けて、足こそ跣足ながら、仲々ハイカラないでたち」[36]である。二人の現代風な青年は、パラオの伝統的な風俗に対し、「活劇の伴奏のつもりなのであらうか、如何にも気取つたポーズで首を振り足踏をしながら、此の烈しい執拗な闘争の間ぢゆう、ずつと輕快なマーチを吹き續けてゐた」[37]という皮肉な描写である。

南方は未開で原始的な所であり、文明開化の「汚染」が波及して

[33] 同前注、p.407。
[34] 同前注、p.408。
[35] 中島敦「夫婦」（同注 20 前掲書）、p.356。
[36] 同前注、pp.356-357。
[37] 同前注。

いない理想郷のはずである。しかし、現実の南洋を目の当たりにして以来、中島の南方に対する理想郷の幻像は破滅してしまった。中島は現実の南洋に表れている不調和に痛ましさを感じ、〈私〉を通して、理想的な南方の消失に対する痛ましさを訴えたのである。

一方、蘭印に上陸してから、高見順の目に映ったのは、文明開化がもたらす不調和より、むしろ和蘭人の殖民政策による厳しい階級制度の下にいる「哀れな土民」の姿である。「褐色の顔は無表情だが、卑屈なものが全身に漂つてゐる」[38]ジョンゴスは、「和蘭治下のインドネシアの土民姿を思ひ浮かべてみるのに、一番強く鮮やかに来る」[39]印象である。いつも和蘭人の前でおどおどしており、見ている人に「しつかりしろ！と怒鳴りたい位」[40]ほど「馴らされた犬のやうなその卑屈さ」[41]を持つジョンゴスに対し、高見順は作品の中で、なんとも堪らない気持ちを何回も表明したのである。また、土民は勤勉に働いているにもかかわらず、給料が非常に少ない。和蘭人の豪華な住宅と皮肉な対照をなすのは、一般土民のごたごたした汚い家である。それだけではなく、物持ちの土民は欧風の服装を着ようとしても、「被征服民族が征服者の和蘭人と全く同じ服装をすることを禁じてゐる」[42]ため、欧風の服装を着る際には、土民の伝統的なカパラカインという帽子のようなものを被り、全身欧風という格好を避けなければならないのである。和蘭の植民地政策の下、蘭印社会で最も下級の「哀れな土民」の姿は高見の描写によって鮮明に提示されている。

中島は南洋の文明化によってもたらされる混乱・不調和な状態に着眼し、作品の中に所々その文明と未開が交錯している不調和な現状を描写している。中島が注目した「不調和」に対し、高見も蘭印の社会現象、例えば、毎土曜の夜、夜中の二時頃まで陽気に賑やか

[38] 同注 27、p.23。
[39] 同前注、p.21。
[40] 同注 26、p.66。
[41] 同前注。
[42] 同注 27、p.27。

に踊っているダンスの話や、兵舎には兵隊が細君と一緒に住んでいることなどを可笑しく感じていた。しかし、高見が作品の中で言及したその「異様な感じ」[43]は、全て和蘭人の習慣や制度によるものである。

パラオは 1885 年よりスペインに植民された。その後、スペインの国力の衰退に従い、1899 年以降ドイツの植民地となった。ドイツはパラオでココナッツ、タピオカ栽培、アンガウルにおけるリン鉱石採掘などの産業振興を行ったが、他のドイツの植民地と同様に、道路や水道などのインフラストラクチャーの整備や現地人への教育はほとんど行われなかった。そして、第一次世界大戦以降、戦後処理をしたパリ講和会議によって、パラオは 1914 年から二次大戦までの二十年間日本に委任統治されていた。一方、蘭印は 1602 年に「オランダ東インド会社」が設立されて以来、オランダ東方貿易の拠点として、都市建設などを進めており、三百年余りに和蘭に統治されていた。パラオと比べれば、昭和 16 年の時点で、何百年間も植民地として和蘭に支配されていた蘭印は、確かに文明化・近代化の程度はパラオより遥かに高かったのである。それ故、高見が見た当時の蘭印には、中島がパラオで見たような「不調和」な雰囲気が既に薄くなっていたのかもしれない。しかし、初めての南洋体験にも拘らず、彼の現実の蘭印に対する印象は何よりも蘭印当局の横暴な植民地政策に留まったのである。高見順の作品における蘭印に関する言説には、明らかに植民地支配者の和蘭に対する批判が読み取れるのである。

---

[43] 例えば、高見順は「蘭印の印象」において、和蘭人のダンスについて次のように描いている。「私は（中略）十一半頃、映画館からの帰り、小型タクシーに乗つて目抜き通りのトンヂュンガン街を通ると、そこの大きなレストランで、和蘭人たちが大勢樂しさうにダンスをやつてゐるのが、蘭印に着きたての私の眼には何か異様に映つた。つづいてホテルの廣間でも美しく着飾つた男女が數多相擁して踊つてゐる。はだしの土人が羨ましさうに外の鋪道に群つて見物してゐる」。（同注 27 前掲書、p.26。）「――夜のダンスを見るのは、何か異様だつたのだ。毎土曜の夜、そのレストランやホテルには、オーケストラの出演があつて、夜中の二時頃まで陽気に賑やかに踊つてゐるのである。以前はもつと遅く、徹夜に近かつたといふ。」（同注 27 前掲書、p.32。）

五、結び

昭和 16 年、中島敦は当時日本に委任統治されていたパラオへ旅に出た。同年、高見順は蘭印へ旅立った。南方に多大な憧憬を持っていた二人にとって、昭和 16 年の南洋行は二人の初めての南洋体験であった。中島と高見はその南洋行によって南洋に関する作品を書いた。しかし、二人の作品において、南洋に対する描写には大きな差異が窺える。

南洋で民俗学者の土方久功氏と親く交流していた中島は、南洋の民俗・慣習を知らなかったわけではない。それにも拘わらず、彼は作品中に故意に南洋島民の言動を「不可解」に描いていた。中島の〈南洋物〉において、彼が文明人としての意識を持ち、南洋島民の慣習を理解しようとせず、自己中心の思考様式によって、南洋を「未開」「非文明化」の場所と看做す意図が窺える。他方、一教育者として、彼は当時、島民を労働者として使いつぶすという日本の植民地政策に反発し、島民を文明開化の道に導こうとする願望を持っていた。しかし、それと同時に、南洋が文明に汚染されず、もとの純朴さのままで残されていくようにと望んでいた。

中島の作品における南洋に対する複雑な心境に対し、高見の作品における南洋言説には一貫した論理が読み取れる。彼は客観的に蘭印土民の習慣や蘭印の現状について説明・解釈したが、その説明・解釈の背後には、高見の蘭印土民に対する親愛感と和蘭人の植民地政策に対する強烈な批判が窺える。作品において、偶には蘭印で見た現象に「異様な感じ」であると評したが、彼に「異様な感じ」を覚えさせたのは、全て和蘭人の習慣や制度によるものであった。

高見順は蘭印行を決意した昭和 15 年は、日本の南方進出の一拠点としてインドネシアの存在が大きくクローズ・アップされた年であった。当時、日本内地で蘭印に関する書物が数多く出版されており、日本中に一種の蘭印ブームという現象が起こったと言える。この蘭印ブームの背後には、梅本宣之が論じたように、「蘭印に対する国民

的関心が高まっていたことを示す」[44]と同時に、「日本政府の政治的関心、より具体的には蘭印進出の政治的野心の高まり」[45]をも示したのである。昭和15年、当時の外相松岡洋右の談話内容から、「大東亜共栄圏」というスローガンが唱えられた。欧米勢力を排除して、日本を盟主とする満州・中国及び東南アジア諸民族の共存共栄を説いた「大東亜共栄圏」の概念は日本中に広げられていた。このような意識を念頭に置きながら、高見順は長い間西洋の覇権に支配されていた蘭印で、初めて南洋の現実を見た。言うまでもなく、当時、西洋の勢力に対抗し、南洋島民と共存共栄する意識も彼の南洋に対する見方に影響した。彼は蘭印で当地の殖民地政策を見た後、「日本は一視同仁の精神であり、和蘭のやり方は軽蔑的差別の精神で、土台、精神がちがふ」[46]と和蘭の植民地政策に反発した。「蘭印での感想」において、高見は「私は、私たち日本人と同じやうな皮膚をし（ほんたうは幾分黒いが)、そしてまた、私たちよく似た容貌をした住民に心秘かに親愛の情を抱いてゐた」[47]と述べ、「私たちとよく似たジャワの住民が、白人の征服され、そしてその土地を植民地にされてゐることに、同情と憐憫と義憤と苦痛を感じてゐた」[48]と自分の気持ちを伝えている。更に、その意識の下で、彼は蘭印の映画を見た時さえも、その「使いの虎が神通力を持つ修行者の主人公を救う」という普通な内容を語る映画に対し、「白人に征服された憐れな土民が、自分達を現在の境涯から救つてくれる何か超人的な力を夢見てゐる」[49]と、自分なりに深く解釈したのである。

昭和十年代の頃、日本中は高見順のように、「日本が先進国からいろいろと学ぶことによって、今日の偉大な日本たり得た」[50]ことか

---

[44] 梅本宣之「高見順における南方行の意味」『高見順研究』、和泉書院、2002年、p.129。
[45] 同前注。
[46] 高見順「蘭印での感想」（同注26前掲書)、p.91。
[47] 同前注、p.89。
[48] 同前注。
[49] 高見順「蘭印点描」（同注26前掲書）、p.52。
[50] 同注46、p.93。

ら、「奇怪な西洋崇拝」[51]をやめ、「東洋の自覚」[52]をすべきと唱える知識人も少なくなかったと思われる。日本が南方へ進出し、西欧列強と拮抗した最中、高見順の作品における南洋言説は、土民に同情しながら和蘭を批判しする意思を強く表現するのも不思議ではないと言えよう。

一方、「蘭印の印象」において、高見順は「ほんたうの親切といふのは、土民の無知蒙昧をそのまま『尊重』して、字の読めないやうな無教育状態にいつまでも突き落としておくことより、字の読めるやうな文化的な高さに土民の一般を高めることの方にあるのではないか」[53]と、和蘭当局が土民に教育を受けさせないことを批判している。高見の批判と対照的に、中島の手紙の中に、日本がパラオで実施していた土民教育に関する記述は興味深いと思われる。妻タカへの手紙で、中島は「今度旅行して見て、土人の教科書編纂といふ仕事の、無意味さがはつきり判つて来た。土人を幸福にしてやるためには、もつと〳〵大事なことが澤山ある、教科書なんか、末の末の、實に小さなことだ」[54]と嘆いている。父・田人への手紙でも、彼は「現下の時局では、土民教育など殆ど問題にされてをらず、土民は労働者として、使ひつぶして差し支へなしといふのが為政者の方針らしく見えます」[55]と述べ、当時日本の植民地政策に不満を表明し、教科書編纂という仕事への熱意をすっかり失っている。実際にパラオで日本の植民地政策を体験した中島敦は日本の植民地教育方針をも批判したのである。初めて南方に行った高見順は、その時点で日本の植民地政策について、まだ自分の目で確かめたことはなかった。高見の蘭印旅行に関する作品の底流には、西洋勢力を批判し、日本を贔屓するという意識が一貫して流れているのである。

---

[51] 同前注。
[52] 同前注。
[53] 同注 27、p.31。
[54] 昭和 16 年 11 月 9 日中島タカ宛の手紙。（同注 30 前掲書、p.656）
[55] 昭和 16 年 11 月 6 日中島田人宛の手紙。（同注 30 前掲書、p.653）

テキスト

高見順（1970）『高見順全集』勁草書房
中島敦（1976）『中島敦全集』筑摩書房

参考文献

梅本宣之著（2002）『高見順研究』、和泉書院
浦田義和著（2007）『占領と文学』、法政大学出版局
エドワード・W・サイード著　今沢紀子訳（1993）『オリエンタリズム 上』平凡社
奥野政元著（1985）『中島敦論考』、桜楓社
勝又浩著（2004）『中島敦の遍歴』、筑摩書房
川村湊著（1994）『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房
木村一信著（2004）『昭和作家の〈南洋行〉』、世界思想社
高見順著（1965）『高見順日記』第 1 巻、勁草書房
土方久功著（1991）『土方久功著作集 6』、三一書房
濱川勝彦著（1981）『中島敦の作品研究』、明治書院

付記

本稿は 2012 年 3 月 22 日に立命館大学文学部・台湾大学文学院共催の「トランスナショナルな文化交流東アジア文化交流についての学際的研究」国際シンポジウムにおける発表原稿を加筆・修正したものであり、行政院国家科学委員会の研究助成（助成番号 NSC 100-2410-H-002-185）による研究成果の一部である。なお、論文掲載にあたり、二名の査読者より貴重なご意見を賜り、深く御礼申し上げます。